



Masanobu Takahama

東京大学大学院修士課程修了。1993年、小学校低学年向けの学習教室「花まる学習会」設立。  
『お母さんのための「男の子」の育て方』『夫は犬だと思えばいい。』など著書多数。

FAMILY & ONESELF how to live smarter

FAMILY & ONESELF

# 勉強も運動もダメな子どもにも何をさせるべきか

## ガミガミ怒るほど「メシが食えない子」に

勉強もスポーツもいまひとつパツとしない。そんなわが子の現状に思い悩む親は少なくありません。でも考えてみれば、優秀な成果を残す子のほうが少数派であり、ほとんどが「その他大勢」です。

子どもが小学生であれば、親はこっとさら焦る必要はありません。大事なことは、目先の勉強や習い事で目立つことよりも、将来的にしっかりと「メシを食っていきける大人になること」のほうです。

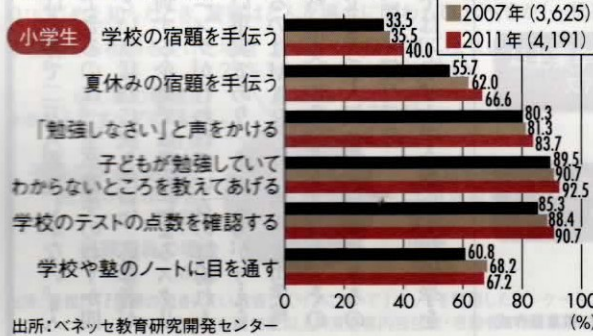
今はまだ凡庸でも、親はおおらかな気持ちで、まずは子どもの存在を100%受け止め、認めてやる。その安心感が飛躍の土台になります。ところが、昨今増えている「心配性の母」は成長を待てません。完璧主義で頑張り屋なタイプの母親ほど世話焼きで（図参照）、ウチの子は大丈夫か、なぜ何をやってもダメなのかと勝手に心配と苛立ちを増幅させ、おほかささを失ってしまっています。

とりわけ男の子の場合、時にヤンチャな言動がちですが、それに対してガミガミ怒り、「いい子」を強要する。いわば、子どもの角をボキンと折って、打たれ弱いヤワな体

質にしてしまうことがあるのです。

メシを食っていきける大人に育てるには、次の五つの基礎力が欠かせません。①ことば（聞く、伝える）の力、②自分で考える力、③思い浮かべる（俯瞰）力、④試そうとする力、⑤やり抜く力。それらが中・高・大学を経て将来的にはプレゼン力や営業力、課題解決力、忍耐力、リーダーシップといった素養につながります。

子どもに干渉する親が年々増えている



## 小学四年までに「五つの基礎力」を鍛えよ

子どもにも備えさせるのが理想的ですが、同時に何らかの「葛藤経験」をさせ、それを子ども自らが克服し自信を得るといことが大切です。例えば、長期休暇を利用した野外体験スクールなどは最適でしょう。親元を離れ、数日間、多くの子と寝食を共にする。自然の中で冒険をしたり、不自由な体験をしたり、参加した仲間同士でのトラブルあり、ケンカあり……。日常のぬるま湯を脱し、そんなちよっぴり手厳しい「社会」でもまれて、遅しなうって帰ってくる。かわいい子には旅をさせよ、と言いますが、まさにそれを。野外スクールは将来メシを食っていくうえでついでに回る様々な「摩擦」を体験でき、人生の糧にできるのです。

また、他の学校の子や異学年の子が参加するそうしたイベントでは、ひよんなことから目立たない子が一躍ヒーローになることがあります。あるとき、私どもが主催した野外スクールで星空観察をしたときのこと。一人の男の子だけが夜空を見上げ、引率者である私たちがさへ判別できなかつたある星座の名前を言い当てました。すると、翌日から、周囲からその子は「博士」のように扱われ、一目置かれるようになりました。聞けば、その男の子は図鑑が大好きだけれどスポーツは得意ではない。ずっと「脇役」だったのです。でも、その夜の成功体験で人生が変わった。あまりパツとしない子が突然、パカッと開花する。そんなことが親拔きのイベントではよく起るのです。

子どもが自信を持つには、小さな成功体験の積み重ねが大切です。最初に一つの目標に向かって頑張る、それをクリアすることで次の課題を自らに設定させ、さらに次の目標に向かっていきます。子どもは親から離れた社会の中で認知されたと感じるとき、精神的に成長します。

ただ、そうした外部の力が有効とはいえず、子どもが何か「得意」を発見し、自信を得るには、母親の無条件の愛情が必須です。

父親は母親が悩んでいたなら、愚痴を聞いたり相談に乗り、母親の心を受け止めます。その際、大事なものは傾聴の姿勢。結論の出ない「女子トーク」につき合う気概を持つことは、結果的にわが子を開花させる土壌づくりとなるのです。